

**無症状者に S 状結腸内視鏡検査で
発見される小ポリープ**

Small polyps found during fiberoptic sigmoidoscopy in asymptomatic patients: Achkar E, Carrey W (Ann Int Med 109: 880-883, 1988)

S 状結腸内視鏡検査がルーチンに行われるようになり、ポリープが発見された場合、その取り扱いをどうするか重要な問題となってきた。今まで、小ポリープは非腫瘍性で悪性化することはなく口側大腸に腫瘍性ポリープが存在する可能性を示すものでもないので、治療や全大腸内視鏡検査は不必要と考えられてきたが、最近小ポリープは過形成性ばかりではなく、しばしば腫瘍性であり、過形成性ポリープの場合でも高頻度に口側大腸の腫瘍性ポリープを合併することが報告されるようになった。そこで、無症状者の直腸

S 状結腸の小ポリープと口側の同時性の腫瘍性ポリープの発生頻度を検討するため、S 状結腸に大きさ 9 mm 以下のポリープが発見された場合、大腸内視鏡検査を行い全大腸のポリープを除去した。3,923 名のうち 258 名(7%)に 9 mm 以下のポリープが発見され、189 名(平均年齢 56 歳)が大腸内視鏡検査を受けた。このうち 179 名に大腸内視鏡検査でも S 状結腸の病変が確認された。

これらの病変の組織像をもとに 3 グループに分けると、1 群(72 名): 過形成性ポリープ、2 群(69 名): 少なくとも 1 個は腫瘍性ポリープ(腺腫)、3 群(31 名): 正常組織のポリープで、7 名は分類されなかった。口側大腸に腫瘍性ポリープが発見されたのは 1 群 21 名(29%)、2 群 23 名(33%)、3 群 4 名(13%)で、過形成性ポリープは 1 群 13 名(18%)、2 群 10 名(14%)、3 群 3

名(10%)であった。

口側のポリープはいずれも 10 mm 以下で癌はなかった。群間に年齢差はなく、5 mm 以下のポリープについても結果は同様であった。ただし、6~9 mm のポリープ 25 名では、口側大腸のポリープを 16 名に認めたが、2 群にのみ有意に腫瘍性ポリープが多かった。

直腸 S 状結腸の小ポリープはいかなる組織型であっても、口側大腸に腫瘍性ポリープが存在する危険性が高く、全大腸内視鏡検査の適応であり、より多くの症例で結果に再現性が得られれば、現在使われている内視鏡検査のガイドラインは再検討される必要がある。

(県立愛知病院内科

種広健治 抄)